

信頼回復

2021. 9. 1

私が小学4年生のときの担任の先生は、字が上手だった。黒板に書くチョークの文字が美しかった。残念ながら、私はその影響を受けなかったらしい。聞いた話だが、昔の師範学校では、板書術も教えたそうである。また、中学校の部活動の先生は、指導に熱心で、休日返上は当たり前だった。

その一方で、生活保護世帯の生徒を自宅に宿泊させて個別指導したり、宿直室で同僚と熱心に教育論を交わしたりしていたと聞く。初任の学校の保護者がよく「〇〇先生は、子どもを家に泊めて面倒を見ていた。大した先生だ」と話してくれた。そんな献身的な教員像は、働き方改革時代の今となっては、過去のものなのだろう。

高学歴者が少ない地方では、教員は数少ない知識人であったし、学校はいわば情報センターだった。指導に熱心な教員は尊敬され、学校は警察や消防と並んで信頼される職場だった。自分は何も悪くないのに、先生からげんこつをもらったと泣き言をいう子に対し、先生が間違はずはない、それはおまえが悪いからだと親からもう一発食らったという。何より保護者から信頼されていた。教職が憧れの職業として、いつも上位にあったのは、そんな尊敬や信頼が背景となっていたからだろう。

ところが、保護者の多くが高学歴者となり、インターネットなどの普及により、知識や情報が簡単に手に入るようになると、学校と教員の優位性は後退した。それとともに、尊敬や信頼という言葉も聞かなくなった。教職課程の受講者数が低迷し、教員採用選考試験の倍率も低下している。

教育水準の維持向上を円滑、確実に図るためには、教育機会の均等を確保する様々な仕組みが必要だった。教員の異動ルールや勤務の公平化もその一つだろう。しかし、その反面、学校は個性を失い、名物教員や個性派校長は、ほとんど姿を消したように思う。

学校、特に、公立学校が奮起するには、やはり人を得る必要がある。福島県内の小学校、中学校、高等学校には約1万8千人の教員がいる。福島県の人口が約184万人である。計算すると、県民の100人に1人が教員となる。この割合が高いか低いかは意見の分かれるところである。

さらに労働人口で考えると、50人に1人が教員となる。こう考えると、教員は決して珍しい存在ではなく、普通に身近にいることになる。特別な存在ではないということである。普通の人が教員になっているとすれば、OJTが重要になってくる。教壇に立ってから、いかに育てていくかという視点である。板書術とあったが、様々な〇〇術の伝承が必要である。教師文化の伝承である。

これからは、信頼回復という考え方ではなく、子どもの目線で考えられる、子どもに寄り添うことができる教員をさらに増やしていくことで、保護者に任せてもらえる存在としての学校を目指すべきではなかろうか。ちょっとした方向転換である。